

## 『パンダ ネコをかぶった珍獣』

倉持 浩 [著]

(岩波書店, 2014年9月, 118頁, 本体価格1,500円+税)

言わずと知れた超人気種。もちろん、一般書は数多刊行されている。実際、最近、他誌でも評された(浅川2012)。しかし、著者は恩賜上野動物園(以下、園)に勤務し、多様な動物の飼育担当後、2004年からジャイアントパンダ(以下、パンダ)に関わって今日に至る(「あとがき」より)。また、畜産学(修士)を学問的背景とするので(奥付の略歴より)、新たな切り口が期待されよう。

本書は六つのパートで構成される。うち一つ「パンダを飼うということ」には、この動物の飼育担当当事者でなければ描けない貴重な内容が多かったが、特に、印象深いのはリクルート面である。園におけるパンダの飼育担当職員は、1972年以来、40名程であるという。そもそも園自体、動物系大学の学生にとって憧れの場の一つである。その中であって、超人気動物を相手にする職。学生にとっては、どのようにしたらそのようなポジションに就けるのかが大きな関心事となろう。いや、学生ばかりではない。勤務先の就職担当委員として、長年、常に頭を悩まされている評者にとっても同様である。そのようなことから、44頁の「努力をして(略)射止めた人もいれば、さまざまな経験を配慮して選ばれた人、運や縁で配属された人」の記述は示唆的であった。運・縁はともかく、「努力」や「経験」についての具体的内容は、大変、気になるところであるが、記述は無いので、想像するしかない。そのような意味で、著者ご自身の経歴はモデルの一つであろう。されど、就職に王道無し。たとえば、著者のような「努力・経験」をしても、望んだポジションに100%に就ける保証は無い。しかし、何もしないよりは確実に成功率は上がる(と信じたい)。なお、このパートで看過が出来ないのは、「獣医」という卑称(と考える獣医師も存在する)が56頁と59頁で使用されていた。特に、後者ではマスコミ発表されたパンダ死亡推定時刻が、実際とは食い違うという大変微妙な問題の中での使用なので、より際立った印象がある。なお、次のパート「リーリーとシンシン、繁殖の舞台裏」(76頁)では、しっかりと「獣医師」とされていたので、こちらに統一して頂きたい。

この本が上梓された時点、この園ではパンダ繁殖に成功をしていなかった。その困難さについては、そのパートで詳述されている。この奮闘の記録は、今後、成功をさせるための敷石となろう。そして、これを現地事例(「パ

ンダの祖国・中国」のパート内で紹介)の導入として結んでいた。しかし、国内ではこれに成功をしている「和歌山アドベンチャーワールド」がある。本書付録「パンダに会える!日本の動物園」の情報では、この施設では5個体が飼育されるとあったが、本書刊行3か月後、双子2個体が誕生したので、現在、7個体となる。いずれにしても、そのような施設とどこが異なるのであろうかと誰もが思う。ほんの少しでも、このような疑問に答える比較検討の記載は必要であったろう。

本書末尾には「引用文献」があり、32本の論文記録があった。ほとんどが最初のパート「パンダをよく見てみよう」と「珍獣パンダのさらなる秘密」の中で引用されていた。体色、形態、生活史、食性、視覚、聴覚、発声、四肢運動性、行動パターン、糞の性状、系統・進化、化石情報、生物地理などが概説された。特に、形態では手の骨格(「偽の親指」)について東京大学・遠藤秀紀教授(本学会理事長)のCT画像解析を、また、食性についてはメタゲノム解析による腸内細菌の中心に解説されていたので、パンダの最新情報を簡便に知る有益ツールとなろう。

お気になされる方もあろうが、人との歴史や日中外交の中における役割などは最後のパート「パンダ・フィーバーの行方」にある。「パンダ争奪戦」とされた節には園以外の複数国内動物園がその誘致に躍起になっていた。北海道に所在する動物園も名乗りを上げていたが、もし、決まったら、主食タケ入手に奔走することになったであろう。

## 引用文献

浅川満彦. 2012. 書評「誰も知らない野生のパンダ」. 生物科学 63: 128.

浅川満彦 (酪農学園大学)

askam@rakuno.ac.jp